

民話・伝承は長い時間をかけて成立するものであり、それゆえ、それらは時として古の歴史を物語るものである。そこで、武庫川にまつわる雨乞い関連の民話・伝承を紹介する。

コーザ岩の上の山百合咲く谷あいには、生瀬には次のような瀧にまつわる話が語り伝えられている。

むかし、伊丹の昆陽の田舎に、百姓の夫婦者がいたという。

ところが子がないので、氏神さんへ「どうぞ子を授けてください」といって願をこめていた。

すると、その甲斐があって、申し子がコロット宿って、男の子が生まれた。

その子は七つになるまで家にいたが、七つになると、毎晩遊びに出て、親が目を覚ますとうちにいない。

どうも合点がいかんというので、ある晩、親が寝たふりをして考えていると、真夜中になると、その子が父母の寝顔をソット眺めて「よう寝たかどうかーそれが、ソット寝間を出て、後の戸を開けて外へ出て行った。

父が何じゃ外へ出て行きよ、コイツはおかしいとますます変に思って、こらひとつ見とどけようと思って、子のあとをつけて家を出た。

ところが、武庫川の川筋に出ると、子がトントンと上がって行って、生瀬の浄橋寺橋（今の生瀬橋、むかしはただ大橋ともいった）の下まで行ったら、親がびっくりして、もう怖くなって、そこから後戻りをして、昆陽の家へ帰ってしまった・・・真夜中の出来事・・・

そうして、母親にその話をすると、親が互いに怖がって知らん顔をして寝ていると、夜が明けて、フイと目を覚ますと、コロット寝間に寝ているので、コリヤどもならんと思って、親があやかしで尋ねてみた。

「お前は毎晩夜遊びをするが、何処へゆくのか、実は昨夜、浄橋寺橋の下まで、お前の後をつけて行ったら、俺は怖いので戻ってきた」と明かし、「こうして七つまで大きくしたが、一体お前は何の生まれかわりか聞かしてくれ」と言った。

そうすると、子が言うには、「つまり、お前達に子が無いので、神様に祈って、母が断食して、人間に産んで貰ったが、俺はどうしてもミソ瀧の水を毎晩一杯飲まぬと生きてゆくことが出来ない。からだが焼けて辛抱が出来ない。

そのかわり、百姓やから、若しヒヤケ（日照り）した折には、白い馬の首を切って、その血潮を二十四畳敷けるコーザ岩へ塗って、あとのヌリガラ（滓）を、どうぞ瀧へほって呉れ。それが俺の好物やから、そうしたら、雨を十分降らす」と言って、そのことを書いた巻物を父母に渡して、そのまま瀧へ帰ってしまったという。（昆陽の大雨乞いの起こり）

また類似の話として、著者が生瀬の古老から聞いた次の話が紹介されている。

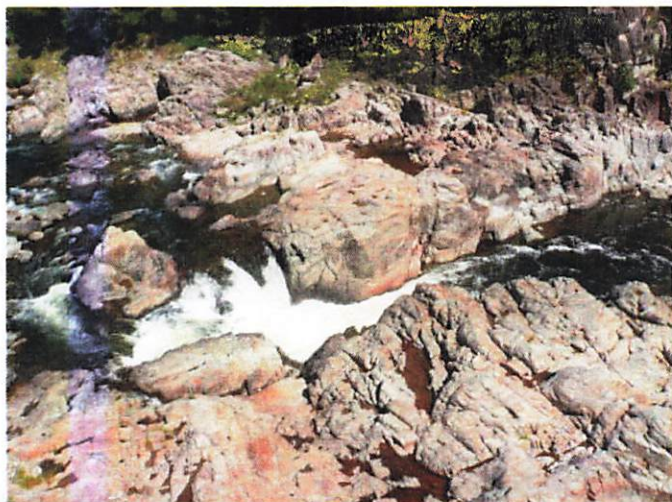
むかし、昆陽の里に夫婦者がいて子が無いので神さんに願をかけていた。

その甲斐があって子が生まれ大切に育てていた。ところが、その子が七つになったある日、行方不明になってしまった。あちこち捜して、ようやく山あいの瀧のところでその子を見つけた。

その子は「俺はこの瀧の主で、神様のために人間に生まれかわったが、俺は毎年一匹づつ白馬の首を食べないと生きていけない。

長いことあなたに育ててもらった御礼に、今後、日照りで困った時には、白馬の首を切って血をその岩に塗って、その滓をこの滝壺に放り込んでくれ。それを俺が食べるから。」と言って、そのことを書いた書物を残して鯉になって渦巻く水の中に消えた。

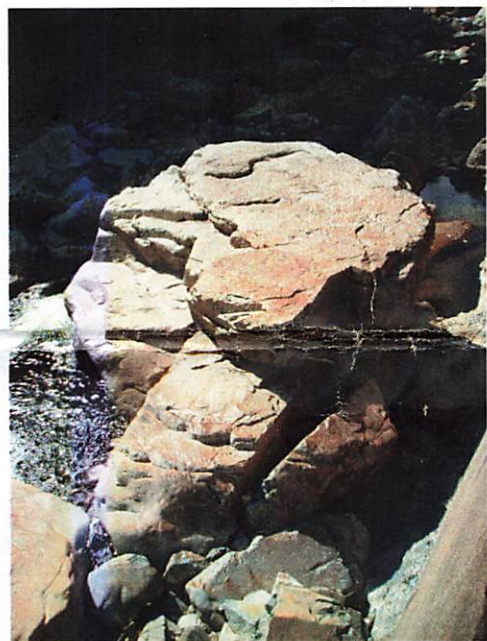
武庫川



武庫川の溝瀧（女瀧：上段） 落差 約 4 m



武庫川の溝瀧（男瀧：下段） 落差 約 3m



高座岩（上流側から見た）



高座岩（下流側から見た）

溝瀧は摂津全域を取り扱った名所案内記『摂陽群談』『名葦探杖』『摂津名所図会』に登場しているのに対し、高座岩は名塩村や有馬郡の地誌に登場するにすぎない。つまり、高座岩は名塩近在の人々のみに知られた極めてローカルな存在であった。

生瀬川の上流、溝瀧の高座岩での雨乞いは、伊丹の昆陽の大雨乞いとして有名である。

伊丹から乗って行った白馬の首を切り、岩にその血を塗って、行基が書いたという伝来の巻物を読み上げる。そのときに白馬に一本でも色のついた毛がまじっておれば雨が降らないし、巻物を読んだ人はやがて死ぬと伝えている。水のない村人にとって雨乞いはそれほどたいせつで厳粛なものであった。生瀬でも高座岩に白馬の血を塗って雨乞いをしたと伝えている。昔は牛の血であったという。

この岩の下は竜宮に通じていてこの上を血でけがすと乙姫さんがおこって雨を降らせ、たすきをかけて洗うのだという。



